
ダルタルニア国の絵師

秋瀬あい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダルタルニア国の絵師

【Nコード】

N3950Z

【作者名】

秋瀬あい

【あらすじ】

いつも控えめであまり他人と向き合って話すのが得意ではない大村 愛は、美術室で油絵を描くのが好きだったが、受験に逐われて勉強漬けの毎日を送っていた。

そんなある日、突然学校で強い地震に見舞われ目を瞑って体勢を崩してしまふ。揺れが収まり次に目を開けた時、そこは何処かの路地裏のようで…

シリアスを装わせたほのぼの恋愛異世界トリップ物です。(多分)

地震は突然に

思えば私はいつも心の何処かで“逃げ場”というものを探していた。他人に心の奥深くまで踏み込まれず決して踏みにじられることのない、そんな場所を…。

そんな事を考えるようになったのはいつからか忘れてしまったが、私は誰かと向き合つのを避け、感情をさらけ出すのを苦手だと思つようになつていた。

だが、そんなことをずっと言っていられないのも分かっていたので、不器用ながらに本心をひた隠しながら今まで生きてきた。たったの18年だが、私にはとても長く感じる。

もうすぐ受験だからだろうか、校内がぴりぴりしている気がする。もっとも私もそのぴりぴりしている者の一人なのだ。

人の少ない放課後の廊下を歩きながら愛は無感動に思った。人がいない渡り廊下に差し掛かると愛はスカートのポケットから携帯を出して家に電話を掛けた。

「…もしもし、おばあちゃん？今日は学校から直接塾に行くからおじいちゃんに車で迎えに来なくても大丈夫だよ、て伝えてくれる？…うん、大丈夫、ご飯はコンビニで済ませるから…うん、じゃあ切るね。」

私の家庭は、祖父、祖母、父、母、兄2人の7人家族で、祖父と祖母は専業農家なのでいつも家にいるがその他の家族は皆各々の職場で働いている。

孫達に優しいおじいちゃんは学校から遠い山奥の家に住んでいる私

を町の公立高校まで送り迎えをしてくれる。山奥なのでバス停は近くに無いし、自転車で通うにしても一時間山道を上ったり下ったりしなければならぬのでこれにはすごく感謝している。だが今日は塾がある日なので迎えは断った。

携帯をポケットにしまい、渡り廊下の窓ガラスに寄りかかる。はあ、と思わず深い溜め息が出てしまい自分に苦笑してしまった。

「…油絵描きたいな…」

私は入学当初から美術部に入学して、その頃から油絵を始めた。最初はどうも自分が思ったように描けなかったのだが顧問の教師や先輩達の教え方が上手かったのか初めての地区展で優秀賞を受賞した。部内の同級生でも2人優秀賞を受賞したが私はすごく誇らしく思ったのを今でも覚えている。

その後も出展する度に何らかの賞を受賞したがそのつどそのつど嬉しさは変わらずあった。だが、ついに念願の県展で優秀賞を受賞し全国展に行けると決まった時の喜びはひとしおだった。

子供の頃のように無邪気にはしゃぎ、うっすら涙を浮かべるほど感情を露にしていたと思う。

それから以前にも増して絵が好きになっていったが、三年生になった私には段々絵を描く時間が減っていき今では美術部に寄る暇すら無くなっていた。

「…そろそろ教室に戻るか。」

またつきたくもない溜め息を一つついて私は歩き出した。

だが、突然辺りが揺れ出した。久し振りの強い地震に立っただけで、私は片膝をついて目を瞑った。

まるで永遠かと思えるほど時間が経ち地震の揺れはゆっくりと収ま

っ
て
い
っ
た。

路地裏でこんにちは

もう12月になるといふのに何故か頬をなぞる風が生暖かい。不思議に思い、目をゆつくりと開けると…そこには私のよく見知った校内の味気ない白壁ではなくすんだ赤茶けた色の煉瓦の壁があつた。何故、思考が一瞬停止したか思ったより早く脳が再起動しここが見知らぬ路地裏であることが分かつた。…だが、なぜ、どうやって、いつ此処に来たかは分からなかつた。

心臓が嫌なくらいに高鳴っているのが分かる、こんな不測の事態に陥つたせいかな汗が掌から滴るようだ。

取り敢えず此処にこのままぼーっと立つていても何もならないだろう、状況を確認するために一旦この路地裏から出ようと思い、重たい足を動かした。

なるべく賑やかな音が聞こえる方へと足を進め、何回か角を曲がり漸くひらけた通りに出た。

…だが、私は通りの光景に愕然とした。

大きな馬車が行き交い、通りの端には地面に直接シートのような物をひきその上に果実や魚、野菜といったものや剣や盾のような物まで様々な商品が売られていたのだ。そして何より私を驚愕させたのが通りを行き交う人々だつた。鼻が高く彫りの深い顔立ちの茶髪や金髪等の外国人が平然と通りに溢れているのだ。

私の足は地に根でも生えたのかと思うほどに微動だにしなかつた。腰が抜けたと言つてもいい。

暫く路地裏で固まつてその賑やかな光景を見ていたが突如としてその均衡は破られた。

「追えー！そつちへ行つたぞ、2番街の方だ！」

怒声のような掛け声があちこちで聞こえ思わず身を竦めてしまいうりになった。

通りの人々も心配そうに辺りを見渡しているのが見えたが、突然通りから私のいる路地裏に人が飛び込んできて私はその人と思いきり正面からぶつかってしまった。

「…い、てて…。」

若い男性の聲がして、直ぐに上体を起こすと目の前に蒼っぽい髪をした青年が地面に尻餅をついていた。

「…あ、あの、大丈夫ですか…？」

「ああ、うん大丈夫だ。君は大丈夫かい？」

青年は直ぐに立ち上がりズボンに着いた土を落とすと私に手を差し伸べた。私は少し躊躇したが、すぐに彼の手をとった。

「…ありがとう。」

「いいえーどういたしまして！君みたいな可愛い子にお礼言われただけで充分嬉しいよ！じゃあ俺、急いでるからじゃあねっ！」

溢れんばかりの笑顔を残して彼は路地裏の向こうに走り去ろうとしたが直ぐに私の方に戻ってきてニカッとまた笑ったかと思うとズボンのポケットから出したペンダントのような物を私の首にかけた。

「これ、肌身離さず持つてて。あ、ただし誰にも見せちゃ駄目だよ！君とまた再開出来ることを祈ってるね」

そう早口で言うと彼は私の首にかけたペンダントを私の制服に入れて今度こそ走り去っていった。

私は何も言い返すことも出来ずにその場に立ち尽くすだけだった。

…彼は一体何者なのだろうか。

漸く思考が状況に追い付いてきたとき、またもや通りから人が飛び込んできた。今度は複数で、紺色の制服のようなものに身を包んだ男性達と先ほどの青年と同じくらいの歳の金髪の青年が走ってきた。皆一様に剣を持っていて何人かは馬にまで乗っていた。金髪の青年もその一人で黒い馬に乗っていたのだがよく見ると金髪の青年は一人だけ紺色の制服のような格好ではなく、白いワイシャツに濃い蒼色のスカーフ、黒い燕尾のような外套を着ていてまるで貴族のようだった。

「お嬢ちゃん！此方に蒼い頭の男が来なかったかい！？」

「…えっと、少し前に向こうに走っていきました。」

血相を変えた制服のおじさんの一人にそう聞かれたので私は正直に先ほどの青年の走っていった方を指差した。

おじさんは「感謝する」と短く応えて、制服の人達を引き連れて先ほどの青年を追っていった。

私はその光景をただただぼーっと見ていたが、突き刺さるような視線を感じて顔をあげると金髪の青年が私のことをじっと見ていた。

「おい、貴様…。さっきあいつらに嘘を言わなかったか？」

切れ長の目にきつく睨まれ少ししたじろいだが、別に疚しいことをした覚えもないので直ぐに首を横に振った。

「…嘘をついた覚えはないです。」

「惚けるなよ？アイツと関わった奴は大概アイツを庇いたがる節があるからな。…だがそれより、貴様のその格好は何だ…？」

彼は訝しげに私を上から下まで見下ろして更に目を細めた。

「何って…ただの制服…、あつ…」

改めて自分の格好を見て気づいたのだが、私は上靴を履いていたのだ。確かに、屋外なのに上靴はおかしい。

「この上靴はですね…、」

説明に窮してしまふ。

「靴はどうでもいい。寧ろその制服とやらは何処のものなんだ？」

あっさり上靴はスルーされてしまったが、制服は別に特段変わった所はない。普通の女子高校生の格好だ。

気だるげな男（前書き）

あけましておめでとございます！

新年も皆様に御愛読いただけるように頑張らせていただきます。

気だるげな男

「え……？…学校の制服ですけど」

少し吃りながら私は彼に訴えたが、彼は更に目を細めて私を見た。

「はあ……？制服？何処にそんな破廉恥な制服着せる学校が………
…あー、街立の学校ならありえるのか？」

ガイリツ？ガイリツが何なのか分からないが、どうやら学校の一種のようなものらしい。

「俺は王立の学校だからよく分からねえけど、よくそんな破廉恥な格好で学校行けるな、…はっ」

さつきから、この青年は破廉恥、破廉恥と連呼しているが今どきの普通の格好だ。白い丸襟の長袖ワイシャツに茶色のカーディガン、あと学校指定の地味な紺色のスカート膝上約8センチくらいの長さ。ちなみに私は比較的地味な方で、派手な子は膝上10センチ以上が当たり前、あと赤色やピンクのカーディガンで登校している子もいるのだから破廉恥ということは無いと思う。

「普通は、膝下10センチのスカートと校則で決まっているだろ。
そんな短いスカートは言語道断だ。」

言語道断ですか。

それにしてもこの青年、本当に失礼な言い方だ。あまりに自信満々に言い切るものだから私の方が悪いことをしているような気持ちになっってしまう。

「…お言葉ですけど、それこそ時代錯誤じゃないですか？どんな名門校に居るか知りませんが、一般の学校ではこれは普通だと思いますよ。」

私がつっぱりと言うと彼は眉を潜めて、あからさまに嫌そうな顔をした。あまり苦言を呈されたことが無いのだろうか、その表情には少し困惑も混じっているように感じた。

「貴様…っ！」「おつ、エリオットー！遅れて悪かったなー」

青年が何かを言おうとしたが、気だるげな口調に遮られてしまった。青年は、ちつと舌打ちしたかと思うと馬に乗ったまま近付いて来た。気だるげな男の方を向き怒鳴り散らした。

「ルーカスっ！！お前、また俺の台詞を遮りやがったな！？」

…どうやら日常茶飯事の出来事のようにだ。

だが、男の方もその事には慣れていくらしく、全然反省した様子も見せず平謝りだ。

「悪かったて、ほら謝っただろ？ところでよー、」

「お前の事を怒ってんのになんだその態度は?!」

何やら長くなりそうな気がする…。

私は激怒している青年を横目に見た後、正面の男性をじっと見てみた。

隣の青年と同様、えらく整った顔立ちだが服装は青年より少しばかりシンプルで、全身黒ずくめと言っても過言じゃないほど黒の多い格好だ。

それにしても、彼の白い肌と赤茶けた髪がその黒い格好と違和感を感じさせそうなものだが、整った顔立ちが上手く野性的で魅力溢れる男性にさせていた。彼の気だるげな態度も普通の男ならだらしなく見えるのに、彼の場合は色気のようなものを感じる。

……これだから顔の良い奴は恐ろしい。

ぼーっとそんなことを考えながら男性を見ていたら、漸く私の存在に気づいたららしい男性が私をじつくりと見て目を丸くした。

「おいおい珍しいこともあるもんだな、エリオットが女の子口説いてたなんて……」

「違っつー!!どうしたらそういう話になるんだよお前は!？」

青年は大きな溜め息を1つつき、頭を抱えながら「俺の従者替えた……」と呟き続ける青年を見ていたらどうしようもなく切なくなってきた。何故か私まで泣きたくなってきた。

「嬢ちゃん、見ない顔だけ何処から来たんだ?……おっと、いけねえ!女の子と話すときは最初に名前を聞くんだっただか?」

青年や私を何処までも置き去りにしていくこの男性がとてつもなくすごい人物のように感じるのは私だけなのだろうか……?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3950z/>

ダルタルニア国の絵師

2012年1月10日00時48分発行